

第 21 回日本 SPF 豚研究会 講演要旨 (於 平成 23 年 6 月 28 日 学会館)

「地域社会の歴史と文化を育むブタ飼養：中国福建省とイベリア半島を中心に」

国立民族学博物館 野林厚志

本発表の目的は、ブタと人間との関係を人類学的な視点から考えることによって、ブタが人間にとって生態学的な資源としてだけでなく、文化的な資源としても重要な役割を果たしてきたことを示すことである。そのための具体的な事例として、中国福建省の客家の人々の社会の中で行われてきたブタ飼養ならびに、イベリア半島で行われているイベリコ豚飼養をとりあげる。中国の事例ではブタが人間社会の中で与えられてきた「財」としての位置づけを歴史的な背景をあわせて考えたうえで、中国の急速な経済生活の変容によって変わっていく社会的な位置づけの現在を紹介する。イベリア半島の事例では、デヘサ (dehesa) とよばれる地中海性森林で飼養されるイベリコ豚を「ドングリ豚」として商品化している現地の様子について、地域社会の活性化の一つの要素として期待されているなかで生じている供給者側と消費者側に思惑の違いなどにもふれながら紹介していく。

「日本 SPF 豚協会年次報告 平成 22 年度 (2010)」

日本 SPF 豚協会 藤田 世秀

平成 23 年 3 月末現在の SPF 豚認定農場は 190 農場 (内 GGP、GP 農場 20、CM 一貫生産・繁殖専門農場 137、CM 子豚育成専門農場 2、CM 肥育専門農場 31) であった。一貫生産・繁殖専門農場は昨年と比べ 3 農場減少したが、肥育専門農場が 6 農場増加し、全体では 3 農場増であった。飼養母豚数は 77,495 頭と 633 頭 (0.8%) 微減した。

生産成績をみると、一貫生産農場では 1 母豚あたり年間肉豚出荷頭数、出荷肉豚 1 頭あたり A 分類薬品費、総合生産指数の改善が見られた。農場回転数、農場飼料要求率は横ばいであった。繁殖専門農場では 1 母豚あたり年間出荷子豚頭数、出荷子豚 1 頭あたり A 分類薬品費、総合生産指数で改善が見られた。1 母豚あたり年間分娩回数、1 母豚あたり年間離乳子豚頭数は横這いだった。肥育専門農場では飼料要求率、肉豚出荷率、総合生産指数が改善された。しかし、出荷肉豚 1 頭あたり A 分類薬品費は増加した。

「養豚環境における病原微生物の挙動とその制御について」

元麻布大学 生命・環境科学部 森田重光

私どもは主として人獣共通感染症の原因となる病原微生物の環境動態とその制御方法について研究してきた。これまでに、クリプトスポリジウムなどの原虫類、HEV、PCV2 を主要な対象として様々な成果をあげてきた。本発表では、これら豚に関する病原微生物の挙動と、その制御方法について説明したい。

① クリプトスポリジウム

当然のことながら、下水からは *C. hominis* が、また畜産廃水からは *C. suis* が主として検出され、河川水ではその混合した分布となる。塩素消毒に耐性があることで有名ですが紫外線に弱いことが分かっている。

② HEV

各農家で浸潤率を調べてみると約半数の農家の豚が HEV に感染していることがわかっている。また、膜処理活性汚泥の除去率は 99~99.99% と非常に高いことが明らかとなった。

③ PCV2

ワクチンの効果を 2007 年より経時的に調べた結果、母豚のみに接種するよりも肉豚にも接種した方が効果が高いことが明らかとなった。

「口蹄疫の疫学：宮崎県での発生を中心に」

農研機構 動物衛生研究所 ウイルス・疫学研究領域 筒井俊之

2010 年、宮崎県で 10 年ぶりに口蹄疫が発生した。発生件数は 292 件に及び、29 万頭の家畜が殺処分され、日本の家畜衛生史上類のない大きな被害が生じた。対策の面においても、日本で初めて緊急ワクチン接種を実施するなど、これまで経験のない規模の防疫対応が行われ、多くの教訓、課題を得ることとなった。特に、口蹄疫の流行をみると、当初の牛での発生に引き続き、豚での発生が相次いだことによって、地域内で急速に口蹄疫が伝播していった。このことは、牛と豚の農家が密集する地域に口蹄疫が侵入したことが、感染が拡大した大きな要因の一つであったことを示している。日本や韓国の例を見るまでもなく、口蹄疫は一度侵入し、感染が拡大するとその制御には大変な労力を要する。侵入防止対策はもちろんのこと、侵入時の早期発見とまん延させないための普段からのバイオセキュリティの向上が重要であると考えられる。今回は、日本を取り巻く口蹄疫の発生状況を紹介するとともに、2010 年の宮崎での口蹄疫の発生を振り返り、今回の口蹄疫発生の疫学的特性と得られた教訓について私見を披露したい。